



明治学院大学機関リポジトリ  
<http://repository.meijigakuin.ac.jp/>

Title	児童養護施設職員の多文化パーソナリティが異文化間感受性に与える影響 文化的コンピテンス教育プログラムへの示唆
Author(s)	鈴木, ゆみ
Citation	
Issue Date	2017-09-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10723/3235">http://hdl.handle.net/10723/3235</a>
Rights	

**児童養護施設職員の多文化パーソナリティが**

**異文化間感受性に与える影響**

**—文化的コンピテンス教育プログラムへの示唆—**

**論文要旨**

**鈴木ゆみ**

## 【第1章・第2章】 問題の概観と問題点の整理,および目的

### 1.問題の概観と問題点の整理

近年,児童養護施設における虐待とネグレクトを受けた子どもの入所が増加し,児童養護施設職員は,生活支援のなかで,さまざまな精神症状や問題行動の対応を求められている(厚生労働省,2014; 奥村・舟橋,2013)。同時に注目すべきは,東京地区における入所児童の約1割が,外国にルーツのある子どもであるという事実である(東京都社会福祉協議会,2009)。日本における外国人居住者の増加と多様化が進むなか,今後,児童養護施設職員が,社会的養護(児童養護施設,乳児院,母子生活支援施設等)において,外国にルーツのある子どもと出会う機会は飛躍的に増加することが予想される(鈴木,2016)。

外国にルーツのある子どものうち,とくに文化移行をした子どもは,母語とさまざまな文化的習慣,人間関係,社会システム等を喪失した結果,トラウマや独特な心理的な問題を抱えやすく,また,移住時の年齢と家族関係,移住のプロセス等が移住先の適応過程に影響を与えることが,近年,先行研究により明らかにされつつある(Bronsterin & Montgomery,2011; Dogra,Karim,& Ronzoni,2011;Ehnholt & Yule,2006;Heumer,Karnik,& Voelkl-Kernstock,2009; Hodes,2000;James,1997;The Center for health and health care in schools,2010;World Health Organization,1996)。一方,日本におけるこの領域に関する実証的研究が少ないことから,鈴木(2016)は,児童養護施設における外国にルーツのある子どものトラウマ症状について検討した。その結果,文化移行する子どもは,トラウマとなるような経験や,度重なる喪失体験をしており,これらが,トラウマ症状に影響を与えていることが示された。

以上のことから,児童養護施設において増加する外国にルーツのある子どもへの文化的な理解とその支援,すなわち,対人援助職が身に付けるべき文化を理解し対処する能力である文化的コンピテンスの研究が必要であると考えられる (Kuhn & Wintrob,2008 渡辺・野田訳 2008;Sue & Sue,1999 ; 鈴木,2011;2016)。

そこで本研究では,広範な文化的コンピテンスの概念要素のうち,以下の2つの文化的コンピテンスの概念に注目した。1 つは,基礎的で安定的な文化的コンピテンスと位置づけられており,他の文化的コンピテンスを促進する可能性が示されている多文化パーソナリティ,もう1つは,感情面に焦点があてられた概念であり,トレーニングや教育が可能であるとされている異文化間感受性である。

多文化パーソナリティとは,異文化間における多文化性(intercultural effectiveness) に注目した概念である。これは,人が異なる文化的環境においてよりよく機能するためには,1)物事を遂行する能力,2)新しい環境における心理的 well-being の感覚,3)異なる文化的背景の人々とかかわる際の姿勢や能力(Van der Zee & van Oudenhoben,2000,p.293),が必要であるという理論的枠組みのもとに発展した(Van Oudenhoven,Mol,& Van der Zee,2003)。多文化パーソナリティは,対人援助職において重要な役割を果たすだけでなく(Ponterotto,Mendelowitz,&Collabолletta,2008),理論的にも近年注目されている文化的コンピテンスの概念の1つである(Matsumoto,Le Roux,Robles,& Champos,

2007;Van der Zee & Van Oudenhoven,2000;2001)。多文化パーソナリティは、欧米を中心に尺度の開発と妥当性、及び信頼性の検討が進められているが、日本における概念化は行われていない。

異文化間感受性とは、「異文化を理解し、認め、受け入れようと動機づけられる動的な欲求」(p.231)(Chen & Starosta,1998)であり、「異文化間の相互作用において、他者との肯定的な感情のシグナルを受けとり、かつ発信する能力を含み、このような肯定的な感情の応答はさらに文化差の承認や尊重を促進する」(p.54)と定義されている(Fritz,Graf,Hantze,

Oellenberg, & Chen,2005)。感受性とは、元来、感情や情動を示す言葉であるが(West,2009)、異文化間接触や異文化体験に関して重要な役割を担っており、文化的コンピテンスを予測する重要な要因であることが分かってきている (Bhawuk & Brislin,1992;Chen,&Starosta, 2005;Jain,2013)。異文化間感受性は、異文化コミュニケーション領域を中心に理論的・臨床的な研究が蓄積されているが、日本における実証的研究はみられない。

さらに本研究では、2つの構成概念間の関連や構造についても検討する。なぜなら、多文化パーソナリティにおけるある特性が、異文化間感受性のどのような下位特性に影響を与える傾向があるのかを明らかにすることで、将来的なモデル化を見据えた理論的な知見に貢献できるためである。先行研究においても、文化的コンピテンスのモデル化の試みが進んでいるが(Wu & Bodigerel-Koehler,2013)、本研究で取り上げる、文化的コンピテンスの基礎から中核的な概念を扱う2つの概念間の関連について検討したものは、国内外においてみられない。

## 2.本研究の目的

1.日本における、多文化パーソナリティ質問紙日本語短縮版、および異文化間感受性尺度日本語版の両構成概念の尺度化を通して、多文化パーソナリティと異文化間感受性の因子構造、および妥当性と信頼性を検討する(研究1,および2,研究3,および4)。

2.文化的コンピテンスの基礎的要素である多文化パーソナリティが、文化的コンピテンスの感情的側面に焦点を当てたダイナミックでトレーニングが可能である異文化間感受性にどのような影響を与えているかを検討する(研究5-1)。

3.異文化間感受性に影響を与えるとされている、多文化パーソナリティ以外の要因を探り、その影響を検討する(研究5-2)。

## 【第3章】 多文化パーソナリティ質問紙日本語短縮版作成の試み(研究1,2)

### 1. 目的

多文化パーソナリティ質問紙日本語短縮版を作成し、尺度の妥当性と信頼性を検討する。

### 2.方法

#### 2-1. 調査対象者および調査時期

関東および関西近郊に住む大学生および大学院生 231 名 (男子 48 名,女子 182 名,不明 1 名,平均年齢 20.89 歳, $SD=1.84$ ) を対象として大学および大学院の授業を通して質問紙を配布し回収した。調査時期は 2015 年 1 月から 5 月であった。

## 2.2. 質問紙

1. 多文化パーソナリティ質問紙短縮版 40 項目を使用した (Van der Zee, van Oudenhoven, Ponterotto, & Fietzer, 2013)。原著者 (van Oudenhoven) に本研究の趣旨を伝え、翻訳の許可を得たうえで多文化パーソナリティ質問紙短縮版を翻訳した。翻訳手続きとしては、まず著者が原版を翻訳し、それを英文校正業者に逆翻訳 (バックトランスレーション) を依頼した。逆翻訳後の英文と原版との等価性に留意し、著者とアメリカに長期の留学経験のある心理学博士号取得見込みの大学院生とともに検討して日本語版とした。多文化パーソナリティ質問紙短縮版は、「社会的イニシアチブ」「情緒的安定」「オープンマインドネス」「柔軟性」「文化的共感」の 5 因子構造であった。「まったくあてはまらない」から、「とてもよくあてはまる」の 5 件法であった。

2. 心理的 well-being の基準関連妥当性を検討するために、日本語版心理的 well-being 尺度 43 項目 (Ryff & Keyes, 1995 ; 西田, 2009) を使用した。

3. 物事を遂行する能力の基準関連妥当性を検討するために、日本版 WLEIS 情動知能尺度 (Wong and Low Emotional Intelligence Scale, 以下 WLEIS とする) を使用した (Wong & Law, 2002; 豊田・山本, 2011)。

4. 異なる文化的背景を持つ人々とかかわる際の興味や能力の基準関連妥当性を検討するために、外国人の友人の有無を尋ねた。

## 3. 倫理的配慮

質問紙配布の際には、目的と方法、個人情報保護について、個人への不利益が生じないための配慮、および研究への参加は任意であること等を口頭で説明した。また書面上でも表紙に同様に記載した。質問紙の表紙および内容については、調査開始前に著者の所属大学における博士後期課程会議の承諾を得た。

## 4. 結果と考察

探索的因子分析の結果、多文化パーソナリティ質問紙日本語短縮版の因子構造は、「社会的イニシアチブ」「情緒的安定」「オープンマインドネス」「規律性」「文化的共感」の 5 因子構造であることが示された。本研究では、原版にて因子化されていた「柔軟性」は見いだされなかったが、その理由として、日本の多文化状況が影響した可能性が考えられた。

基準関連妥当性の検討のために、心理的 well-being、および情動知能との関連を検討した。その結果、規律性を除き、概ね高い相関関係が見られた。また、多文化性の基準の 1 つが、文

化的背景の人々とかかわる際の興味や能力であることから、外国人の友人関係との関連を検討した結果、友人関係の有無によって多文化パーソナリティ質問紙日本語短縮版の下位尺度得点に有意な平均値の差がみられた。信頼性についても、文化的共感を除いて $\alpha$ 係数が,.70を上回る値が得られた。研究2において、再検査信頼性を実施したところ、十分な値を示したため、概ね、その一貫性と安定性が確認された。

#### 【第4章】 異文化間感受性尺度日本語版作成の試み（研究3,4）

##### 1.目的

異文化間感受性尺度日本語版を作成し、尺度の妥当性と信頼性を検討する。

##### 2.方法

###### 2-1. 調査対象者および調査時期

関東および関西近郊に住む大学生および大学院生293名（男子39名、女子254名、平均年齢19.7歳、 $SD=1.26$ ）を対象として大学および大学院の授業を通して質問紙を配布し回収した。調査時期は2015年1月から7月であった。

###### 2-2. 質問紙

1.日本語版異文化間感受性尺度(Chen,2000) 24項目を使用した。原著者(Chen,G)に本研究の趣旨を伝え、翻訳の許可を得たうえで異文化間感受性尺度日本語版を開発した。翻訳手続きとしては、まず著者が原版を翻訳し、それを英文校正業者に逆翻訳(バックトランスレーション)を依頼した。逆翻訳後の英文と原版との等価性に留意し、著者とアメリカに長期の留学経験のある心理学博士号取得見込みの大学院生とともに検討して日本語版とした。異文化間感受性尺度は、「異文化への関与」「文化的差異の尊重」「異文化とかかわる自信」「異文化とかかわる喜び」「異文化への注意力」の5因子構造であった。「まったく当てはまらない」から、「とてもよく当てはまる」の5件法であった。

2.異文化間感受性日本語版の基準関連妥当性を確認するために、先行研究にならい、以下の尺度を用いた(Chen,& Starosta,2000;West,2009)。

- 1)異文化間感受性は、自己価値や自己評価と関連があると考えられているため(Chen,1997)、自尊感情尺度(Rosenberg,1965;山本・松井・山成,1982)との関連を検討する。
- 2)異文化間感受性は、セルフ・モニタリングと関係があると考えられるため、セルフ・モニタリング尺度との関連を検討する(Chen,1997;石原・水野,1992;Lenox & Wolfe,1984)。
- 3)視点取得は、異文化間感受性を発達させる要素と考えられていることから、視点取得尺度との関連を検討する(Chen,1997;Davis,1983;桜井,1983;Sue & Sue,2003)。

3. 異文化間感受性は、他者との肯定的な感情やりとりをする能力である。そのため、外国人の友人の有無によって、得点に差があるかについて検討した。

### 3. 倫理的配慮

研究 1, 2 と同様であった。

### 4. 結果と考察

本章では、Chen & Starosta(2000)の異文化間感受性尺度日本語版の因子構造を検討した。その結果、原版の因子構造とは若干異なり、「異文化への関与と配慮」、「異文化とかわる自信」「異文化への寛容性」「異文化への偏見の低さ」「文化的差異の尊重」の 5 因子構造が見いだされた。因子名が原版とは異なったことについては、文化的自己観(Markus & Kitayama,1991)の視点から、日本においては、他者との協調や結びつきが重視され、自らを周囲に合わせるような対人関係を構築する傾向があることが考察された。

妥当性について、異文化間感受性の基準関連妥当性の検討のために用いられた、視点取得、自尊心、セルフ・モニタリングとの相関関係の結果から、概ね妥当性が支持された。また、異文化間感受性が、異文化における他者との感情のやりとりの能力を測定していると考えられることから、外国人の友人の有無について平均値の差を比較したところ有意であった。信頼性について、3つの下位尺度において、 $\alpha$ 係数が.7以上を示した。研究 4 において、再検査信頼性を実施したところ、十分な値を示したため、概ね、その一貫性と安定性が確認された。

【第 5 章】 児童養護施設職員の多文化パーソナリティ、および、異文化体験が異文化間感受性に与える影響—文化的コンピテンス教育プログラムへの示唆—(研究 5-1,研究 5-2)

#### 1. 目的

第 1 に、児童養護施設職員を対象に、多文化パーソナリティ質問紙日本語短縮版と、異文化間感受性尺度日本語版について確認的因子分析を行い、因子構造を検討する。第 2 に、確認的因子分析の結果から明らかになったことをもとに、児童養護施設職員において、多文化パーソナリティ質問紙日本語短縮版の各因子が、異文化間感受性尺度日本語版の各因子に、どのような影響を与えているのかについて検討する。第 3 に、児童養護施設職員のデモグラフィックデータ、および異文化体験が、異文化間感受性に与える影響について検討する。

#### 2. 方法

##### 2-1. 調査対象者および調査時期

関西近郊の A 県の児童養護連絡協議会に依頼し、県下の児童養護施設に配布を依頼した。最終的に得られたデータは、児童養護施設職員 311 名（男性 71 名、女 240 名、平均年齢 34.1 歳、 $SD=11.09$ ）で、調査時期は 2015 年 6 月から 7 月であった。回収率は約 52%であった。

## 2.2. 質問紙

- 1) 研究 1, および 2 において, 多文化パーソナリティ質問紙日本語短縮版の探索的因子分析により, 因子構造と妥当性, および信頼性を検討した結果, 採用された 26 項目を採用した。
- 2) 研究 3, および 4 において, 異文化間感受性尺度日本語版の探索的因子分析により, 因子構造と妥当性, および信頼性を検討した結果, 採用された 16 項目を採用した。3. 基本的な属性の他に, 外国語能力, 海外経験等を尋ねる質問項目を加えた。

## 3. 倫理的配慮

研究 1, 2 と同様であった。

## 4. 結果と考察

### 4.1. 多文化パーソナリティ質問紙日本語短縮版, および異文化間感受性日本語版の因子構造の確認的因子分析

多文化パーソナリティ質問紙日本語短縮版について, 因子構造が妥当かどうかを検証するために, 確認的因子分析を行った。その結果, 適合度について, 一定水準以下であった( $\chi^2(292)=717.888, p<.001, GFI=.846, AGFI=.815, RMSEA=.069, CFI=.794, AIC=835.888$ )。

そこで, モデルの適合度を改善するために, 本データにおける共分散, および相関係数と, 標準化係数(パス係数)を検討した結果, モデル 10(項目数 16)において,  $\chi^2(96)=168.987, p<.001, GFI=.940, AGFI=.915, CFI=.945, RMSEA=0.050, AIC=248.987$  となり, 適合度は一定の水準に達したと考えられた。しかし, 項目数については, 研究 1 の項目数より少なく, 16 項目となった。その理由として, 大学生・大学院生と児童養護施設職員との属性(デモグラフィック)の違いが影響している可能性が推測された。

異文化間感受性においては, 確認的因子分析の結果, 研究 2 と同様に, 異文化への関与と配慮, 異文化とかかわる自信, 異文化への寛容性, 異文化への偏見の低さ, 文化的差異への尊重の 5 因子構造が妥当であると判断され, 概ね, 各種適合度指標も高かった( $\chi^2(97)=193.865, p<.001, GFI=.931, AGFI=.903, RMSEA=.057, CFI=.913, AIC=271.865$ )。研究 3, 4, および本結果から, 異文化間感受性尺度日本語版は, 安定した因子構造を有しており, 異文化間感受性を測定するための有効な尺度であることが示された。

### 4.2. 児童養護施設職員の多文化パーソナリティが異文化間感受性に与える影響

決定係数( $R^2$ )は, 「異文化への偏見の低さ」以外はすべて有意であった。標準偏回帰係数は, 「異文化への関与と配慮」は, オープンマインドネスから正の影響( $\beta=.34, p<.001$ )と, 文化的共感から正の影響( $\beta=.23, p<.001$ )がみられた。情緒的安定からは負の影響( $\beta=-.14, p<.05$ )がみられた。「異文化とかかわる自信」は, 社会的イニシアチブからの正の影響( $\beta=.21, p<.01$ )と, 情緒的安定からの正の影響( $\beta=.13, p<.05$ )がみられた。「異文化への寛容性」は, オープンマインドネスからの正の影響( $\beta=.25, p<.001$ )と, 社会的イニシアチブからの負の影響( $\beta=-.14, p<.05$ )がみられた。



-.14,  $p < .05$ )がみられた。「異文化への偏見の低さ」は、オープンマインドネスから正の影響 ( $\beta = .18, p < .05$ )がみられた。「文化的差異の尊重」は、社会的イニシアチブから負の影響 ( $\beta = .18, p < .01$ ), オープンマインドネスからの正の影響 ( $\beta = .35, p < .001$ )がみられた。以上の結果から、次のような考察がなされた。

まず、決定係数の結果から、異文化間感受性のなかでも、とくに「異文化への関与と配慮」「異文化とかかわる自信」「文化的差異の尊重」が、多文化パーソナリティからの影響を受けることが示された。「異文化への寛容性」と「異文化への偏見の低さ」は、多文化パーソナリティからの影響は小さかった。

また、異文化間感受性に影響を与えている多文化パーソナリティの特性は、主に「オープンマインドネス」、「文化的共感」、「社会的イニシアチブ」、「情緒的安定」であった。「規律性」は、異文化間感受性にほとんど影響を与えていなかった。

次に、異文化間感受性の各下位因子別の特徴を示す。

「異文化への関与と配慮」は、オープンマインドネスと文化的共感からの正の影響がみられた。このことから、「異文化への関与と配慮」には、異文化への開かれた態度や共感が基礎となり、異なる他者との肯定的な関与や配慮がなされることが示唆された。また、情緒的安定からの負の影響がみられたことから、文化的に異なる他者と積極的にかかわる際には、情緒的に不安定になることが推測された。

「異文化とかかわる自信」は、社会的イニシアチブと情緒的安定からの正の影響がみられた。このことから、異文化状況における、物事を遂行する能力である社会的イニシアチブと、異文化接触で生じる可能性のある不安や緊張を減じる情緒的安定が、異文化とかかわる自信を高めている可能性が示唆された。

「異文化への寛容性」は、オープンマインドネスからの正の影響を受けていた。このことから、自他への開かれた、柔軟でとらわれないオープンマインドネスの態度が、異なる他者の受容に影響を与えている可能性が推測された。また、社会的イニシアチブからの負の影響もみられたことから、控え目で消極的であることが、異文化の受容の過程で生じる葛藤を回避したり、葛藤を和らげたりすることに影響していると推測された。

「異文化への偏見の低さ」は、多文化パーソナリティからの影響は小さかった ( $R^2 = .03$ )。

「文化的差異の尊重」は、オープンマインドネスからの正の影響と社会的イニシアチブからの負の影響を受けていた。このことから、「文化的差異の尊重」には、自他への開かれた、とらわれない態度であるオープンマインドネスが影響しているとともに、異文化の差異を尊重する際に生じる葛藤を回避したり、和らげたりする機能のある、控えめで消極的な態度(社会的イニシアチブのマイナスの影響)がみられる可能性が推測された。

文化的コンピテンスの教育プログラムへの示唆として、オープンマインドネスや文化的共感のような特性を補完するためには、人間のストーリーとして描かれる映画や、実際の体験をもとづいたリアリティのある語りを聞くことで、異文化の他者に対する感じ方や捉え方が変化する可能性を提示した。また、社会的イニシアチブや情緒的安定性を高めるためには、異

文化接触によるストレスによって生じるネガティブな情動をうまく扱うことを学ぶことが提案された。

#### 4.3. デモグラフィックデータ,および異文化体験からみた,異文化間感受性への影響

異文化間感受性日本語版へのデモグラフィックデータや異文化体験からの影響を明らかにするために,階層的重回帰分析を行った。その結果,有意な影響を与えていたのは,海外旅行経験( $.153, p < .01$ )や外国人の友人がいること( $.123, p < .05$ ),等の異文化体験であった( $R^2 = .266, R^2$  変化量 $=.012, p < .05$ )。このことから,異文化間感受性が比較的発達している可能性のある職員とそうではない職員とで,異文化間感受性をはじめとする文化的コンピテンスの教育プログラムの内容やトレーニングを工夫する必要が示唆された(Brislin & Yoshida, 1994)。

また,児童養護施設職員の年代によって異文化間感受性に違いがあることも示されたため(20代 $=.214, p < .05, 40$ 代 $=.175, p < .05, R^2 = .167$ ),より効果的な教育プログラムを実施するために,年代を加味した内容や実施方法を検討することが求められる。

#### 【第6章 総合的考察 本研究から示唆される点】

##### 1. 日本の児童養護施設における外国にルーツのある子どもを理解するための文化的視点

第1節では,児童養護施設の外国にルーツのある子どもの心理的特徴と,心理支援のための文化的コンピテンスの先行研究のレビューを行った。このことにより,児童養護施設における,外国にルーツのある子どもの理解と対応に寄与すると考えられた。

##### 2. 多文化パーソナリティ質問紙日本語短縮版,および,異文化間感受性尺度日本語版の意義

本研究における尺度作成により,日本における両概念を測定することが可能となった。また,両尺度の日本における概念化の特徴について考察し,各々の研究領域に新たな知見を提供した。

##### 3. 日本の児童養護施設職員の異文化間感受性と多文化パーソナリティとの関連の特徴

第1に,オープンマインドネスと文化的共感が,異文化間感受性に影響を与えていることが示された点である。この2つの特性は,異文化間の相互作用を促進する力になると考えられているため,このような相互作用性が異文化間感受性の基礎となっている可能性が推測された。

第2に,情緒的安定が,異文化接触時に生じる可能性のある心理的ストレスを低減している可能性が考えられた。また,文化的背景の異なる他者と積極的に関わろうとする際には,情緒的に不安定になる傾向が示唆された。

第3に,異文化状況における,物事を遂行する能力である社会的イニシアチブが,異文化とかわる際の自信の基礎にあることが推測された。また,社会的イニシアチブは,異文化接触において,ある種の感情の生起や認知的葛藤が生じた場合,周囲の他者や状況に自らを合わせるような態度として機能している可能性が指摘された。

#### 4. 文化的コンピテンス教育プログラムへの示唆

多文化パーソナリティの特性を補完できるようなプログラムへの提案がなされた。また、児童養護施設職員の異文化体験や年代によって文化的コンピテンスの教育プログラムの内容やトレーニングを工夫する必要性が示唆された。

#### 5. 本論文の限界と今後の課題

第1に、本研究における多文化パーソナリティ質問紙日本語短縮版については、「規律性」因子に関する課題が残された。また、研究1において示された5因子26項目が、児童養護施設職員を対象とした確認的因子分析においては、5因子16項目が妥当であると判断された点である。今後は、項目数の多いオリジナル版の91項目版等(van Oudenhoven & van der Zee, 2001)との比較検討や、他の対人援助職でも同様の構造がみられるのか等、日本における多文化パーソナリティを測定するための尺度のさらなる精緻化が求められる。

第2に、研究5では、多文化パーソナリティ質問紙日本語短縮版と異文化間感受性尺度日本語版との関連について、重回帰分析を行った。今後はさらに、この2つの概念の関連のモデル化を目指すことが望まれる。

第3に、今後は、異文化間感受性尺度日本語版を用いて、実際に教育プログラムを実施し、異文化間感受性にどのような効果があるのかについて検討することが求められる。